お話づくり

～以下、保育士杉木と、子ども達の会話の様子です～

＊＊

「すぎきせんせ～おはなしして～」

『いいよ！』

ハロウィンの前のためかリクエストは…

「吸血鬼！」「ゾンビ」「おばけ」「ハロウィンの話！」とモンスター絡みの話ばかりでした。

『杉木先生のするお話によく出てくる、昔の男の人って誰だっけ？』

「たごさく！」

『ピンポーン♫今日はその時代のハロウィンの話をするね。でもね、たごさく君のいる江戸時代には幽霊はいても、モンスターはいないの。いるとしたら・・・？』

「いるとしたら？」

『何だと思う？』

「ゆうれい？」

「わからないな～ゾンビしか分らないよ」

『ヒントは…（手でジェスチャーをして）なーんだ？畑にあります～』

「にんじん？」

「だいこん？ごぼう？え～～？」

「はいっはい！ぼく、わかる！○○！」

子どもたちは続々と手を挙げて、野菜の名前を言います

『ヒントはハロウィン。ハロウィンと言えばどんな野菜？』

「あっかぼちゃ？！」

『ピンポーン♫今日はかぼちゃお化けに出会った、たごさく君のお話をするよ』

「かぼちゃのおばけ　ほいくえんで　みたことあるよ」

『どこで？』

「えっどこ？ぼくみたことないよ」

「あっ　わすれちゃった」

「げんかんじゃない？ハロウィンのかざりつけ　されているよ」

「それだ～」

こんな風に、単語を連想し自分が見た出来事などを子どもたちから発言されることもよくあります。

『たごさく君が、夜おなかを空かせて歩いていると畑を見つけました。畑にはー』

「あっ！かぼちゃがある」

『そう　かぼちゃの畑でした。たごさく君はしめしめと思い、かぼちゃを食べようとしました。でも…あれ？かじれない。たごさく君は困りました。きゅうりやトマトならすぐ食べられるよね。何でかぼちゃは食べられなかったのかな？』

「かたいからかな？」

『うん、固いからかも。どうやって、かぼちゃ食べるか知ってる？』

「しらなーい」

『かぼちゃは包丁で切って、小さくします。小さくしたらかぼちゃを煮て柔らかくします。そうしたら食べられるよ』

「へ～そうなんだ」

「あのまま食べるのかと思った」

『たごさく君は食べ方がわからず、う～んう～んと唸り、頭を抱えていると…おやっ？影が見えました。』

「えっだれ？」

『たごさく君は草むらに隠れ、その様子を見ていました。その影は・・・』

「わかった！それがオバケだ！」

「でも、オバケでてこないって すぎきせんせい いっていたよ」

『そう、それはオバケではなく…』

「どうぶつ？」

『違ったの。それは泥棒だったの。』

「どろぼう？」

『泥棒は畑からかぼちゃを取っていたのです。…人の畑から勝手に大切な野菜を取って良いのだっけ？』

「よくない」

「どろぼうは やっちゃダメなんだよ」

『なんでダメなの？』

「それは わからない」

「ひとのもの とっちゃいけないの」

「だって かってにとられたら かなしくなるの」

『そうだね。みんなも自分のものを勝手に取られたら悲しくなるよね』

『その泥棒は畑から、かぼちゃをたくさん取って行ってしまいました。さぁたごさく君はどうするかな？』

「もしかして ぬすんじゃう？」

「え～わるいことなのに？」

『なんと、たごさく君は盗んでしまったのです。それもた～くさん！自分が食べる為ではなく、売ってお金にするためだったのです。そのかぼちゃはとても美味しいと町で評判になり、たくさん売れました。たごさく君は、たくさんお金を稼ぎました』

「だごさく、わるいやつだ」

『そうだね。さて、そんなたごさく君、かぼちゃを今よりもっと、たくさん売ったらもっとお金を稼げると考えました。なので、また…あの畑に行きました。』

「えーいけないんだ」

「だめだよ！そんなことしたらよくない！」

『そうだよね。でもたごさく君は行っちゃったの。たごさく君は夜になると畑に行きました。草むらに隠れ、だれもいなくなるまで静かに待ちました。そ～っとあたりを見て誰もいないことを確認し、かぼちゃまで走りました。畑に着くと、たごさくはかぼちゃを、チョキンチョキンと切って腕に抱えていきます。しばらくそうやっていると…大きなカボチャを見つけました』

大きなカボチャを手を広げ、ジェスチャーで表現すると子どもたちは、

「そんなおおきいの？」

「そんなのないよ」

『アメリカにはこ～んな大きいのがあるんだよ。さて大きなかぼちゃを見つけた、たごさく君はしめしめ、こんな大きければ高く売れるぞ~と大喜び！持っていた包丁で切ろうとすると…あれれ？』

「なにがあったの？」

『かぼちゃが口にみたいに半分に割れ、たごさく君が持っていた包丁を食べちゃったの』

「え～～～～！？」

『たごさく君はびっくりして腰を抜かしてしまいました。そのかぼちゃんはムシャムシャと包丁を食べると、たごさく君に襲いかかってきました。たごさく君はびっくり!!助けてくれ~と言って暴れると、なんとかぼちゃが喋りました』

「なんて言ったの？」

『“よくも畑からかぼちゃを盗んだな。許さない。お前を食べてやる”と言ったの。たごさく君は泣いて謝りました。ごめんなさい。かぼちゃを盗んでごめんなさい。すると、かぼちゃは…』

「たべちゃった？」

この言葉の前に「殺しちゃった？」とこの子は言いましたが、その言い方は恐いよと伝えると、自分で「たべちゃった？」に変更しています。

「許したんじゃない？」

『そう、許してくれました。かぼちゃは、そんなに謝るなら反省したんだろう。まあ畑に来たら次は食べてやるーと言い残し暗闇に消えました』

「ゆるしてくれたぁ。でもどこに きえたんだろう？」

『どこに消えたかは分かりません。たごさく君は恐くて急いで逃げ、もう二度とだれかの大切なものは盗まないぞと心に決めたのでした。おしまい♪』

子ども達は「こわかった」「おもしろかった」「ぬすむのはだめ」と思い思いの感想を述べていました。

おしまい

＊＊